



地域で

子どもたちを 育もう！



アンビシャスな子どもを育てたい

「アンビシャス広場の取り組み（福岡県）」

福岡県は、2001年から青少年アンビシャス運動を展開し、豊かな心、幅広い視野、それぞれの志を持つ（アンビシャスな）たくましい青少年の育成を目指している。その一つに「アンビシャス広場」という地域での子

どもの居場所づくりを目的とした事業がある。07年から放課後子ども教室として取り組んでいる44広場を含めて、現在アンビシャス広場は260カ所。この中でも特に子どもの自主性を尊重した活動を行う国分（太宰府市）、大堰（三井郡大刀洗町）、青葉（福岡市）、つやざき（福津市）の各アンビシャス広場を取材した。（取材・文／鈴木 さや香）

異年齢の子ども社会をつくり出す

国分では和ゴマをツールに異年齢の子ども社会

をつくることで、子どもたちの自主性やコミュニケーション能力を育んでいる。青葉では和太鼓などのツールにより、高学年が低学年に教えるなど異学年の交流が促され、子どもたちの中で自然とリーダーが育っている。大堰では、子どもの要望でサークル制にしているが、高学年がサークル長になり、各イベントの企画や運営も子どもたちが行うなど、子どもたちに任せる姿勢が特徴的だ。一方、つやざきでは子どもは本来自由に遊ぶものと、自由な遊び場となっているが、週末の「アンビ塾」で子どもたちが遊びを企画し、グループで行うため、自然に子どもたちのリーダーができ、日常の活動にも反映されている。やり方はさまざまだが、子ども社会づくりに成功している。その成功には、次の共通した特色があった。



和ゴマ。
どっちが長く回せるかな？



キャンプの実行委員会。どんなグループ分けにしようか考え中



大人は手を出し過ぎない

イベントを実施する場合でも、ある程度の枠は大人が決めるものの、中身は子どもたちに任せている。大堰では、開所式は子どもたちがプログラムを組み、進行も自分たちで行う。キャンプも大人は行き先と安全性の配慮のみで、子どもたちが事前に内容を話し合い、決めて実行する。大人が場を提供することは必要だ。つやざきでも広場は指導の場ではないと考え、見守りを大人の役割としている。青葉では多少のケンカでは大人は口出ししない。

仲間づくりの仕掛け



自由遊びだけでは異年齢の仲間づくりはできない。そこできっかけとして和ゴマや和太鼓などを取り入れているが、国分では子ども同士が教え合い、関係をつくるためにちびっこ指導員制がある。青葉の和太鼓、大堰のソーラン節では、かっこよく技を披露し、教えてもらえる上級生の姿を見て、

下級生が憧れ、学ぶ。大堰では高学年のサークル長に出欠も届けさせている。

地域ぐるみで子どもを育てる



スタッフには地域ボランティアが多い。多くは高齢者、そして親や祖父母だが、地域の人が入ること子どもが地域の大人と知り合い、成長する。大人は見守りの目となる。つやざきでは積極的に保護者へ参加を呼びかけ、大堰もスタッフに取り込んでいる。また、青葉は広場OBの中高生が多数参加して遊びをリードしたり、自治会などとも連携し、地域ぐるみで運営している。

各広場ごとに特色があり、子どもの自主性やリーダーシップ、コミュニケーション能力が高まったという評価を得ている。

アンビシャス広場から見えてきたことは、子どもの力を引き出し、異年齢の子どもも社会をつくるためには、まず地域の大人が積極的に参加し、子どもたちに任せて、見守りながらサポートすることであると感じた。

